

遊びと学びのコラボレーションによる 地域交流活性化システムづくりに関する研究 — 大学附属幼稚園を拠点として —

(平成21年度から5年間にわたる、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業による研究の構想と計画)

金田 利子

．経緯とねらい

1．この事業への取り組み

附属幼稚園の園長として

筆者(金田)が本学附属幼稚園の園長時代に、老朽化し始めている園舎の建て替えの話が持ち上がった。耐震性という点では、かなりしっかりした建物であったことから、問題はないのであるが、使用側からは雨漏りもあり、そこそこに傷みが見られ、危険な箇所もあるため、建て替えは必須であり、その事態は法人としても認めるところであったからだ。

公的に費用の出るところはないかと、法人としても探してきたところ、「私立大学戦略的基盤形成支援事業」というものがあり、研究に関する経費で建物の助成されるものは、文部科学省の私立大学に向けられた経費はこれしかないこと、これこそが、理念にも叶っていることが分かった。それは、筆者が園長の最後の年である平成20年度のことであり、その年の秋頃のことであった。

折しも、本学では、地域との関わりが学園を挙げての課題としてきており、大学においても、複数のG P(文部科学省の教育助成「Good Practice」)において、この視点で採択されてきた。これをもっと包括していく取り組みが必要になってきていた。園長としても、生涯発達の最も初期に当たる幼児期からの教育と関わって地域が活性化していくことの必要性を感じてきていた。そこには本学附属幼稚園がこれまで果たしてきた遊びを中心とした三層構造による質の高い保育を、今日的課題にさらに応える、地域の子育てセンター

としての役割を一層明確に位置づけていく上でも、極めて当を得たチャンスであると考えた。そして、大きく見たとき、副園長を中心とする附属幼稚園スタッフのそうした課題への自覚と研究への積極的姿勢も、とみに増してきている時期でもあり、この機を逃してはならないと考えるに至った。筆者自身としては、大学附属幼稚園の建て替えと研究を真に一つに出来る可能性のある、この事業の趣旨に正に叶う研究が展開でき、建物も建つという一石二鳥の取り組みであり、法人が1/2拠出するとはいえ、研究経費を除き、建物のみで1億5千余万円を導入できるかどうかがかかっているという、大学附属園長の使命にも似た思いから、この事業の研究計画を立て、申請書(研究構想調書、テーマ調書)づくりに取り組むことにした。

2．研究の組織化

この事業は決して建物を建てることが自己目的であってはならない。幼児教育と地域活性化を結ぶ研究に必要な不可欠な建物の建設というところに真意がある。

まず現在学内で取り組まれている様々な地域に関わる研究を統合していこうということから、各方面に呼び掛けた。

一つが、現代G Pの、「アートでつくる障害理解社会の創生」を担当する杉山貴洋氏、もう一つが特色G Pの20年度(前年まで代表の小松歩氏は長期研修中)の代表瀧口優氏、また、その一環でもあり、「ころころの森」にも関わっていて、今日的課題でもある世代間交流活動の代表としての草野篤子氏、附属幼稚園において園と連携して

食育に取り組むと共に「ころころの森」、その他小平市やその近郊で食育活動に取り組んでいる林薫氏、そして、こうした子育て広場に関わり、初期の遊び体験の重要性を生涯発達と関わらせて考えてきた当時園長の金田利子の5人がチームを組むことになった。

それぞれの取り組みが、この節末に掲載した5件*の研究テーマ・プロジェクトである。各プロジェクトにもスタッフは必要であったが、まずはこの5人で構想を練り、「この指とまれ」方式で加わるスタッフを求めることにした。しかし、実際には、全学での取り組みということから、ともかく、参加して頂けそうな方には予定として計画書に掲載させて頂く形を取った。

それから、11月、12月、1月、2月と建物自体の構想と合わせつつ研究調書の内容づくりと書き上げに入った。構想を練って話し合う段階では夢を語り、かなり楽しい時間でもあった。だが、実際に書き上げる段になると、科学研究費の申請よりはかなり多い枚数になるが、それほど多くの字数で書く分けでもないのに、費用との整合性や実際にやれることと構想とのかねあいなど、5年間の計画でもあり、かなりの詰めが必要で、終わりの頃には徹夜同然の日が多く、ついには貫徹もして書き上げた。勿論、事務局も一緒に協力体制を組んできた。最後の日には、細かな直しや、形式をそろえる作業のため事務局のスタッフにも徹夜同然の作業をお願いした。

そうした苦労を重ねただけに、まず内定の報が届いたときには、あたかも子どもの生まれたときのような喜びがあった。

そして法人の建設関係のとりくみと合わせてついに2年目にして建物も実現した。

これからは生まれた子どもをどう育てるかである。地域交流の活性化とそのためのシステムづくりが効を奏したとき、この数ヶ月の努力が実ったことになる。国民の税金から実質7500万円余を導入するということが、容易なことでは無いことが骨身にしみると同時に、これから実らせてこそ、

国民のウェルビーイングに還元できるのではないかと、重い責任を感じている次第である。

3. 取り組みの本格的開始に当たって

その後、教授会でも呼び掛け、改めてスタッフを募り、この研究プロジェクトの事務局を担う担当者も採用され、2年目の現在、1年目の助走期を経て本格的に研究が開始されようとしている。

その時に当たって、この構想について、センターの年報の場をお借りして、全学の、また関係者の皆様にお知らせし、ご理解を仰ぎ、これからでも様々な形で参加して頂きたく、本事業の構想を掲載させて頂く次第である。

* 5つのプロジェクト・テーマ

- 1) 生涯遊び心の形成による内面的地域活性化に関する研究
- 2) 地域世代間交流による地域活性化に関する研究
- 3) 多文化交流・児童文化研究
- 4) 障がいのある子どもない子もワークショップ実践的研究
- 5) 食育でつなぐ幼稚園と生活科教育における研究

・ 本事業の意義と目的

1. 目的の概要

本事業の目的は、「遊びと学び」のコラボレーションによる地域交流の活性化システムづくりをするものである。

現在、日本の地域社会は不安定な状況を迎え、急速に孤立化が進んでいる。一方で、近年の国民生活選好度調査では「家族、地域、職場の人のつながりは、精神的なやすらぎをもたらす」ことが認識され、地域におけるコミュニティの確立が求められている。そして、地域にひらかれた大学が必要とされ、いくつかの実践的研究も始まっている。しかし、人間の内的な変化を計測することは困難であり、共通理解の方法も確立されていない。そのため、地域連携の手法が点在し、有機的に結びついていないのが実状である。

そこで、本学の附属幼稚園に「地域交流研究セ

ンター」を設立し、地域交流の拠点形成する。本学の特色は、保幼小の教員養成校であるとともに、発達臨床、家族支援など、生涯発達をテーマにしてきたことである。この特色をいかし、5つのテーマを設定する。5つの視点で、実態調査と実践研究を統合する。人間が、生涯、人間らしく生きていくために、地域に根ざしつつ生涯発達の拠点になりうるための基礎研究として、科学的な検証をおこなう。これが、本研究の学術的な特色であり、実践化と統合化が往復する研究拠点を形成するものである。

また、「遊び」は、結果として学びにつながり、「学び」は、あらたな遊びの質を高めていく。幼児教育におけるこのコラボレーションのはじまりとして、「遊び心」を焦点に、交流の質的变化を測定し、地域力の向上を客観的に示す指標の研究方法を明らかにする。遊びを「遊び=自我の揺れ動き」*と定義し、交流のプロセスや、地域連携の広がりを測定する。ともすれば、遊びは、ゆとりや余暇と解釈されるが、自我の揺れ動きとしての「playfulness」の視点に立てば、生涯における発達の基礎となりうるものである。この「遊び心」を形成し「学び」につながる環境を、発達環境と位置づけ、発達環境が豊かな地域社会の確立に役立つことを検証する。

そして、本研究の意義は、循環型の地域交流システムづくりをおこなうことである。附属幼稚園を拠点とした地域交流により、大学生、園児、保護者、卒園児など、その家族を通じた、つながりや「遊び心」が育ち、地域コーディネーターとして地域に根づいていくことが期待できる。「地域交流センター」が、循環型の地域交流システムづくりの基盤となる。

2. 発達における遊びの特徴と可能性

ここでこれまでの遊び論を総括し、筆者の見解を含めた発達における遊びの特徴とその可能性について箇条書き的に述べておきたい。

1) 遊びの特徴

遊びは面白いから行うものであり、それ自体が目的であって、他の何かのための手段ではない。¹⁾ それ故熱中するとフローの状態²⁾になる。

遊びの心理的特徴は「自我の揺れ動き」³⁾であり、そこに瞬時にきめるワクワク感がある。この考え方と関わると思われるが、遊びにおいては心理状態を見ていくことの必要性があるのではないかと⁴⁾いう視点が提起されてきている。

遊びはパラドックスの関係にある。面白いから遊ぶ。しかし、より面白くしていこうとするとそこに必ずルールが必要になる。⁵⁾ここに結果として教育的意義がみられる。すなわち、自由と強制の間の矛盾を止揚して行かざるを得ずそこに自発的強制という関係が生まれる。自由な存在であると思われていても、やがて今の大人を越えて社会を発展させていかねばならないという強制とも言える歴史的課題をもつ子どもには、それを止揚するものとして遊びが必然になる。⁶⁾

遊びの中での人間関係には上下の関係はなく、おもしろさをともに追及するという点でまさに対等である。

遊びの、結果として育つものは大きい。遊びでこそ育つものは、先の自由と強制の矛盾の克服のように現実の矛盾を越えるための創造性を培う。その中で、人間関係の心の機微とか、機械的に決めるのではなく、手加減、味加減、等々具合や按配を自分の感性で知ること⁷⁾、合意能力・自治能力の形成、その他人生を面白くするとともに、多角的に見ていく力につながる。

遊びには、発達初期には模倣遊びやもてあそびが見立て遊びへとつながるなど、幼児の後期からは、ごっこ遊びやより複雑なルールのある遊び、つくる遊び、労働的遊びなどへと展開する。遊びの発達には末尾の文献欄にあげたもの⁸⁾他種々あるが、いずれもそこに発達の变化の法則を見い出している。

遊びの中でももっとも中心となるのが虚構の世界で振舞うごっこやルールのある遊びであろう。うそこの世界の中で子どもはその役割を担うこ

とで責任をとっている。⁹⁾

その中では子どもは、自分が見ている世界を見立てるのでなく、「～というもの」という一般化した甘認識で振舞う。(いつもおとなしい姉も遊びで姉役になると、いわゆる姉らしい振る舞いになる(ヴィゴツキー))。一般化

系統発生と個体発生の関係で遊びを捉えると、系統発生においては遊びは労働の後に発生し、個体発生においては遊びの後に労働が発生すると考えられる。

2) 大人の生活の変化と遊び

こうしたことを考えると、いくらでも今日的な研究課題が出てくる。

ごっこ遊びが成立するには 子どもに見えていることと、 やってみたいのにやれない、あるいはやらせてもらえない、という二つの条件が同時に揃わないと実現しない。無医村ではお医者さんごっこは発生しない。農業ごっこが昔も今もあまり見られないのは、かつての農業は子どもには見えていたけれどもやらされないところが手伝わされていた(条件2×)し、今の農業は子どもには見えていない(条件1×)ゆえではないかと思われる。¹⁰⁾

したがって、大人の生活が子どものあこがれになりやってみたいと思えるような大人と子どもの生活場面をそれぞれの家族でのみならず家族をこえて地域につくっていくことが大切になる。それもまた、地域を発達環境にしていく一つの方向ではないかと考える。

そうした観点もまた、遊びと学びのコラボレーションによる地域活性化システムづくりというテーマを生み出す論拠になっている。

本研究の対象となる小平市は、第三次小平市地域福祉活動計画案(平成21年度～30年度)が、策定され、本学も更なる地域連携が求められている。地域社会の交流を強化・拡充するために必然性の高い研究であり、大学として具体的な研究拠点を形成することが可能な研究である。

以下、5つのプロジェクト毎の当時の計画内容

の一部を掲載する。

3. 5分野からなるプロジェクトの内容の概略

1) 生涯遊び心の形成による内面的地域活性化に関する研究

子どもは、「子ども心*」を遊びの中で豊にしている。しかし、加齢と共に子どものころを忘れていく。子育て中の親たちは今の生きにくい社会の中で、子どもを他の子の育ちと比べて心配を募らせ、理由は何であれ、神経症的になっている。その他の世代も様々な競争の中で疲れている。

*物事に熱中し、不確実さに進んで挑戦し、世界の不思議さへの驚きを受け入れ、矛盾や葛藤を多様な発想で乗り越え、他者の言葉をまっすぐに聞くこと。(アーウィン・シンガー)¹¹⁾

地域の活性化を単に経済的にだけではなく人間の生きる意味において活性化して行くには、子どもも大人も面白さを追求していく遊びで地域をつなぐことが大切ではないかと考える。そこで、この研究では、白梅幼稚園¹²⁾を中心に、遊び心を遊び体験をとおして広げ、遊び心で町をつなぐ実践の5年間を単位に計画し、その成果の記録検証を行う。

(代表: 金田利子)

2) 地域世代間交流による地域活性化に関する研究

本研究でいう世代間交流とは、子どもから青年・中年・高齢者まで障がいの有無に関わらず、地域さまざまな人が世代を超えて、共に学び成長する場をつくり、実践することである。幼稚園を地域の拠点にした大学・学生と住民の連携による世代間交流の実践、かつ「子ども、青・壮年、高齢者」という三世代の交流の実践を通して地域・大学・学生の協力と互恵性を高め、文化・歴史・芸術・生活技術を伝承する一方で、地域の良さの保存・保護や活性化をはかり、かつ統合や地域の課題を解決していく。

また、これらの実践的研究と並行して、その記

録検証方法を確立する。昔の歌や紙芝居など、地域の特性が広がる活動を実践し、その効果測定をおこなう。

(代表：草野篤子)

3) 多文化交流・児童文化研究

様々な文化背景を持った子どもたちが白梅幼稚園に入園してくる。大学の附属幼稚園ということもあり、地域の期待にこたえて外国籍の子どもや障がいを持った子どもたちも少なくない。こうした子どもたちや親たちが住んでいる地域の幼稚園として、どのように多文化共生のこころを育てていくのか、地域の保護者のつながりを作っていくのか、共生を柱とした地域づくりを、子どもの生活の背景にある文化や言語を取り上げて、子どもたちのアイデンティティの形成、環境整備、支援体制のあり方について研究を行う。

外国籍の子どもたちが孤立しがちな地域の中でどのように発達していけるのか、地域のソーシャルキャピタルとの関連性なども視野に入れた研究を行う。

(代表：瀧口 優)

4) 障がいのある子どもない子もワークショップ実践的研究

本研究は、障がいのある子どもの個別支援の構造化を確立し、家族や学校と連携し、地域連携の形成を目的とする。実践的研究として、表現活動をおこなう造形あそびのワークショップを定期的で開催する。また、「遊び心」のある記録検証システムを開発し、子どもに還元できる方法を作成する。子どもが身につけるペンダントカメラによる仰視撮影の定期記録と音声録音をおこなう。俯瞰撮影では得られない表現のプロセス、他者との関わり、環境への適応変化を記録し、集積する。この記録と観察をもとに、個別支援の方法を確立し、環境の整備をおこなう。玩具や人形、カードなど「遊び心」を取り入れた個別支援アイテム、サインシステム、就学支援シートなどのユニバーサルデザインを作成し、地域連携をはかる。ア

トワークショップの実践をもとに、障がいのある子どもを地域で支えていく手法形成の研究をおこなう。

(代表：杉山豊洋)

5) 食育でつなぐ幼稚園と生活科教育における研究

小学校1年生における「小1プロブレム」が社会問題として注目され、保育所、幼稚園、小学校などで具体的な方策を見出ししていくことが求められている。そこで本研究では、幼児教育と小学校低学年の「生活科」教育を食育を媒体として就学前教育から小学校教育への円滑な移行の為の具体的な活動内容を実践・検証することを目的とする。

更に本研究の特色は幼稚園教育での特徴でもある保護者参加型で行うことである。他者とのかわりが希薄化しがちな環境の中で保護者もまた孤立しやすく、「子育てのしにくさ」、「生きにくさ」につながっているものと考えられる。そのため、大学を拠点とした本研究の活動への参加を通して、保護者の意欲を持って生き生きと子育てし続ける力、そして生き生きと生活していく力を育むことを目指すものである。

(代表：林 薫)

・ 本事業の期待される効果

1. 端緒の取り組みから

本事業は今、緒についたところである。それぞれのプロジェクトが動き始めたところである。筆者の所属する生涯遊び心プロジェクトを例にとれば、子どもだけでなく老若男女が思い切って遊び、大人も遊びの面白さを再体験することによって、子どもを理解する視点を育てるように取り組んでいる。子どもと一緒に「面白かったー。」という体験が増え、その体験によって町がつながるとき、子どもと大人の関係が豊かになると仮説している。5年間でこの活動を何回か続け、効果を見る。

すでに1回行った老若男女がとことん遊ぶワークショップにおいて、次のような例が見られている。子どもに自分の意図を押しつけてきて

いた親と、それに困っている女子青年が親子で参加することによって、事態が少し好転してきたというものである。

一方で遊びを大事にしてきた園で、幼児期を過ごした子どもが大人になった今、それがどう影響されているかについても調査する。附属幼稚園は、まさにその典型である。こうした調査の方法も開発し、生涯の人格の発達における幼児期の遊びの意義もあきらかにする。また、市民の遊び心の実態も調査する。老若男女の密度の濃い遊び活動の効果が市民の遊び心の発展に、どう影響するかも追跡する。

2. 社会的に見た来される効果と課題

今、日本の社会は、「一億総うつ病化の時代」¹³⁾ともいわれている。こうした状況は、社会の側からも改善することが必要であるが、このプロジェクトでは、遊び心を育てることで、この事態を切り開いていこうとしている。

上記で挙げた例は、「生涯遊び心」プロジェクトの場合であるが、他の4つのプロジェクトも大きなまちづくりの構想をもって取り組んでいる。これを大学附属幼稚園の地域交流研究センターを媒介に進めていこうとしている。これから、こうした夢を緻密な研究と結合していく必要がある。

ここでは、5つのプロジェクトの実践的研究の効果を遊びと学びのコラボレーションによるシステムづくりにおいてみようとしているが、その方法の開拓が必要になる。まず、このプロジェクトに一度でも参加した人たちがどのように動き、どのようにつながり、どのように町内外に広がりをもっていかそのプロセスでの感想を紙上でやりとりし、発展的交流をすすめて追跡していく。また、これらのプロジェクトで開拓してきたことを他の地域においても再現可能なようにシステムを視覚化していく。そして、これらの実践的研究に参加した方々が研究の対象としてではなく、研究の主体となっていくような構想を実現できるような方法を開拓していきたい。

そこで、本プロジェクトが所期の目的を果たしていけるよう大学や地域の関係者の皆様は勿論、関心ある多くの方々のご協力を心より求めて止まない。今回は、計画のほんの一頁であるが、年々、実質的な研究ができるようにとスタッフ一同考えている。

最後に、筆者金田は、定年で退職になり、全体のチーフを退いたが、生涯遊び心の研究者として残り、先に述べた、この事業という「子ども」を育てる一端を担っていく所存である。このプロジェクトという「子育て」への支援を心よりお願いして稿をとじさせていただきます。

注及び参考文献

- 1) 遊びのこの本質は、以下の古典以降共通している
ヴィゴツキー、柴田義松・森岡修一訳「子どもの精神発達における遊びとその役割」
『児童心理学講義』1976 明治図書
(著作の初刊は1933年、レニングラード教育大学講義『心理学の諸問題』の速記録)
ホイジンガ、高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』
中央公論社 1985 (著作初刊1938)
カイヨワ、清水幾太郎・霧生和夫訳『遊びと人間』岩波書店 1970 (著作初刊1958)
- 2) 尾関周二『遊びと生活の哲学』大月書店1994
- 3) 河崎道夫『あそびのひみつ 指導と理論の新展開』ひとなる書房1994
- 4) 加用文男「ごっこ遊びの矛盾に関する研究：心理状態主義へのアプローチ」心理科14(1), 1-19, 1992-05-31
加用文男「幼児の想像遊びにおける多視点態度性」心理科学30(2), 43-56, 2010-02-20
- 5) ヴィゴツキー、柴田義松・森岡修一訳「子どもの精神発達における遊びとその役割」
『児童心理学講義』1976 明治図書
- 6) 河崎道夫『子どものあそびと発達』ひとなる書房1983

- 7) 河崎 2) に同じ
- 8) 勅使千鶴『子どもの発達とあそびの指導』ひ
となる書房 1999 この文献には「あそびの
種類と発展過程」の図が別に添付されている。
- 9) ヴィゴツキー前掲書
- 10) 金田利子「ごっこ遊びと農業労働的遊び 子
どもの発達環境として」『C and D』V0
I.23, No.91 PP.25-29
- 11) 佐伯胖 「なぜ今，幼・保・小の連携か」
『幼児の教育』 102 巻 第 11 号 PP.4-6
2003.11.
- 12) 白梅幼稚園のあそび論の大元になるのは，
久保田浩『遊びの誕生』誠文堂新光社 1974
久保田浩『子どもと遊び』誠文堂新光社
1984
- 13) 香山リカ著『“私はうつ”と叫びたがる人たち』PHP 研究所，2008，p.25